

---

# 世界の鎖

レイン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界の鎖

### 【Nコード】

N8116Z

### 【作者名】

レイン

### 【あらすじ】

ある日、突然異世界に召喚された専門学生、冴木漣はどこにでもいる極普通の二十歳の女性だった。異世界の王国ナイトレインで国王の花嫁になれといわれ戸惑うが、元の世界に未練の薄い彼女はあ  
る条件と交換に”花嫁候補”となる事を承諾する。

## 詳細

### 舞台

ロストテクノロジー

・魔法と遺失技術が発達した異世界ユーリア。古代遺跡より発掘された遺失技術は太古の技術であり。遺失技術に魔法を付与することにより、オーバーテクノロジーを使用している。

### ユーフェリア詳細

・魔法文明の発達した世界であり、生活レベルとしては中世ヨーロッパ並みだが、魔法を駆使する事により現代世界よりもある意味便利な世界。

・魔法には属性が存在し人々は主に火、水、風、地に属し極稀に至宝属性と呼ばれる、薄暮の属性と暁の属性を持つものが存在するが、数千年前からこちら、薄暮の属性を有する者は確認されていない。

・属性の確認は簡単な物で、個人の髪色を見れば一目でわかる。およそ10歳前後で髪色が変化し、力が強い者ほど属性色が濃くなると言われている。

・個人の有する属性が一番強いが、他の属性魔法も使用できる。

ex、火の属性者 赤・カーマイン等 桜色・サーモン等

水の属性者 青やシアン等 白藍色・ベビーブルー等

風の属性者 緑やボルト等 秘色・シャルトルーズ等

地の属性者 茶やチョコレート等 小麦色・ベージュ等

### 登場人物

・冴木 漣（20）

ある日突然、召喚により異世界に連れてこられた専門学生。パティシエの卵であり趣味と実益を兼ねた職に就きたいと考えていた。異世界で薄暮の女神、国王の花嫁、と呼ばれ困惑する。

・アベル・ナイトレイン（25）

異世界ユーフェリアに存在する王国ナイトレインの若き国王。王位に就いて僅か一年で腐敗した貴族社会を肅清し、正常化した賢王。銀色の髪と冬の湖のような瞳をした麗人。暁の属性と水の属性を有している。

・クライブ・ブランドナー（28）

ナイトレイン王国の国王付き近衛隊長。アベルとは幼馴染の関係でもあり身分を超えた友人の関係を築いている。マローネ色の髪と鳶色の瞳をした地属性の青年。

・ランスロット・デイケンズ（35）

ナイトレイン王国王宮魔法師長。ユーフェリアの至宝と呼ばれる世界最高峰の魔法師でありアベル至上主義者。漣を召喚した張本人であり、申し訳ない気持ちをもってはいるものの、アベル至上主義であるが故に見ないふりをしている。濃いシアン色の髪と瞳をした中世的な美貌の持ち主。

・ヒューバート・デニス（68）

王宮に勤める使用人を一手に纏める侍従頭。元は王家の専属家令だったがその腕を買われ使用人たちの長となる。私生活では愛妻家であり6人の息子を持つ家庭人。アベルを主人であると同時に息子のように思っており常にアベルに付き従う。妻は侍女頭アンナ。アイヴィーグリーンの髪と瞳をした風属性者。

・アンナ・デニス（62）

侍従頭ヒューバートの妻であり6人の子供の母の経験を買われたアベルの元乳母。一度は老齢を理由に乳母を引退した物の、人柄と能力を買われ侍女頭として復帰。温和で常に笑顔を絶やさない人物だが怒らせるとランスロットですらたじたじとなる。

・アリス・リデル（15）

成人を迎えたばかりの侍女見習い。明るくおしゃべりで空想好きな少女で侍女たちのムードメーカー、好奇心が強く何かとドジな面もあるが異世界からやって来たヒロインに憧れており、3侍女の中では最も忠誠心が強い。調味料などを専門に扱う商家。桜色の髪と瞳

からわかるように、魔力はさほど強くない。

・エイミー・コレット（19）

ディケンス家の分家筋にあたるコレット子爵家の三女。物静かで思量深く物知りな女性。多くを語る事はしないものの、必要な時にはちゃんと助言をする。王宮魔術師と親戚筋でありながら魔力が弱い事にコンプレックスを持っているため、それを補おうと勉学にはげんでいる節がある。白藍色の髪と瞳をしている。

・シンシア・ラドリー（23）

3侍女の中では最年長となる侍女。ともすれば天然と取られがちなほどおっとりとした女性で、庶民の出であるにも拘わらず貴族の子女が好む音楽や刺繍、お茶に精通している。男嫌いな節があり、侍女の仕事も普段は女性しかいないということから選んだ。老人や子供、気を許した男性以外には普段からかんがえられぬほど辛辣になる。ベージュ色の髪と瞳をした長身の女性。実家は貿易を営む商家。

## 詳細（後書き）

登場人物とかの紹介ですが、あくまで作者の覚書です。

## プロローグ

この世界は主神の末娘、女神ユーリアの為に創造されたという。  
肥沃な大地と咲き乱れる花々。

この地で女神ユーリアは育った。

しかし、ある日この世界で”大災厄”アルマゲドンと呼ばれる神同士の争いが起り、その争いに巻き込まれたユーリアは邪神の呪いにより命を落とす。

愛娘失い嘆き悲しんだ主神は、一筋の希望に縋り、この地に住む人々に魔法の力を与えた。時が経ち、呪いの効力が薄れたその時、再び女神ユーリアがこの地に現れるようにと……。

そうして神々の王は愛する末娘のため、この地に様々な加護を与えユーリアの魂を宿した者が現れるのを長く見守り続けるといふ。

【伝承神記 愛しい子の章より】

## 第一話・美しき王と花嫁召喚

この世界には5つの大陸と6つの海があった。

その大国の1つ、神聖ナイトロード王国では今まさに国の存亡をかけた、召喚の儀が行われていた。ここに至るまで、国の要たる大臣や神官を交え何日にも渡る協議が続けられ、ようやくこの日にこぎつけたのは、偏にこの国の主である国王の伴侶を召喚するためである。

この世界は神の加護を受けた世界。

古の昔、この世界は邪神の呪いにより、魔物が徘徊するようになってから人は滅ぶ寸前まで追い込まれた。しかし神より魔法の力を授けられた人々は、魔法を駆使し何とか魔物やその悪しき力を退けたのだ。

この力を持続させるためには、国の主が数百年ごとに異世界から花嫁を召喚せねばならない。

それは偏に古に神の愛した末娘、ユーリアの再来を望む神に対する感謝の意だった。

が、古の戦いから数千年、未だ神の愛し子ユーリアは現れていな

い。そして今年は神聖ナイトレイン王国が神の娘を召喚する。が、この古き習慣に反対する者がいた。

他でもない、異世界の者を娶る事となる国王本人だ。

国王は問う、『古き神の習慣になんの意味があるのか？』と。神官は答える、『神より与えられし加護のため神の娘が必要だ』と。

話し合いは平行線の一途をたどった。異世界の娘など必要ないと言い張る革新的な王と、神の望みを叶えなければ加護が失われると諭す保守的な神官。

幾日にも渡った話し合いの末、神官たちの言に折れたのは王の方だった。

『これより、花嫁の召喚を始めます。宜しいですね、陛下』  
『ああ』

夕闇せまる頃、ナイトレイン王国の若き国王であるアベル・ナイトレインは、召喚の儀が行われるにあたり正装に身を包んでいた。

スラリとした均整のとれた長身と、筋骨隆々とはいえない物の常に鍛錬を欠かさなかったためか細身のしまった身体をしていた。キ

メの細かい雪花石膏の肌は艶めかしく、立っているだけでも男女関係なく人を惹きつける魅力の持ち主だった。

その魅力の1つがその髪にあった。月の光を集めたような銀の髪は、宝石の粉を散りばめたように輝き、しっとりとした艶を保っている。

そして最大の魅力と言っても過言ではない青い瞳。冬の湖を模したような青い瞳は、理知的な光と清澄な色を称えている。

アベルは年若い侍女達が、自分を熱い視線で見つめていることも気にせず、淡々と事を進めた。今回の儀式を行うに当たって、実質的に実務を行う魔法師長官が再度確認する。

この世界にあっても召喚陣を起動できるほどの魔力のある者は少ない。魔力の貯蓄量というのは個人によってその量が異なる、貯蓄量が多ければ多いほど効果の大きい魔法が使えるし、少ないと然りだ。

その中でも、アベルの目の前にいる魔法師長は別格だった。たった一人で魔方阵を起動させる魔力は至宝と呼ばれるのに相応しい魔法師であった。

やがて、神殿内に灯された明かりが一つ、また一つと消されてゆ

く。

『では、これより儀式に入りたいと思います』

神官の一人の宣言により、いよいよ異世界の花嫁が召喚されようとしていた。

## 第二話・フェーリスの花嫁

初夏も過ぎ季節は夏の盛りへと移っていた。頬を撫でる風に初夏の爽やかさはなく、日々、不快な湿度を増してきている。ビルの狭間に見える濁った空が徐々に濃い紫に染まってゆくのを、彼女  
冴木漣はぼんやりと眺めていた。

生まれて間もなく、孤児院の前に放置されていた彼女に家族と呼べる存在はなかった。否、孤児院で子供たちの世話をしてくれていた大人たちや、自分と同じく孤児院で生活していた子供たちは、もしかしたら家族といえたかもしれない。だが、本来愛を育み育ててくれるはずだった親から捨てられた事実がある限り、彼女は常に孤独だった。

18歳で孤児院を出てから2年。彼女は都内のマンションで一人暮らしをしながら、フードコーディネーターを目指し専門学校へと通っていた。

その日は、2ヶ月後に開催される製菓コンテストに出品するスイーツの資料を探しに、街中へと出てきていた。

都内でも大型店で知られる書店で数冊の本を購入し、急いで自宅マンションへと帰ろうとしていたその時だった。

「あつつい〜」

冷房の効いた店内から出た途端、額に滲む汗をハンカチで拭ったその時だった。ふと、見上げた空が歪んだ。

暑さのせいで眩暈でも起こしたのだろうか？

(違つ……これは、眩暈なんかじゃ……)

胸に抱えた本の入った紙袋をギュツと抱きしめたまま彼女はそこで意識を手放した。

魔法師長の唱える召喚の言の葉に魔方陣が光りだす。徐々にその光力を増し始めた魔方陣がやがて宙に漂い、巨大な門の形となる。召喚術の特徴的な現象だ。

やがて、魔方陣で形成されて扉が開き、そこから召喚対象が出現するのだ。

今回の召喚の儀に立ち会っていた、国の主だったものたちは扉が開いてゆくのを固唾を飲んで見守っていた。が、扉は開くどころか、徐々にその形を崩し始め、やがて誰もが今回の召喚が失敗に終わっ

た、と落胆の息を吐きだしかけたその時、それは起こった。

扉が激しい勢いで開くのと同時に、目の眩むような白光が神殿のいたるところを包み込んだのだ。そして、光の収まったそこに彼女はいた。

『これは……………』

眠ってしまったているのだろうか？胸に何やらしつかりと包みを抱えたまま、彼女は身体を丸め横たわっている。魔方陣の中央、横たわる彼女にアベルがそっと近づく。

覗き込んだ顔はまだ、年端もゆかぬようなあどけない寝顔だ。

この世界では貴色とされている黒の髪を持ち、象牙色の柔らかそうな肌、プクリとしたピンクの唇が、表情を愛らしくさせている。

『陛下……………』

主の行動をそれぞれの思惑のまま見守っていた臣下の一人が、恐る恐ると言った風情で声をだした。

『ランスロット』

『……………はっ』

呼ばれたのは今回の召喚の立役者でもある魔法師長だ。

『彼女を私の部屋へ』

『陛下の、お部屋にでございますか？』

『ああ……………』

『かしこまりました』

深々と腰を折った臣下をよそ目に、数人の女たちの手により運ばれてゆく彼女を、アベルはただ見つめていた。

その日の政務を終え、アベルが自室に戻ったのは夜半を少し過ぎた頃だった。念のため、彼女の側に付けておいた気の利いた侍女から、彼女が目覚めたという報告はなかった。

自分のベッドで、子猫の様に身を縮めて眠る彼女の隣に、そつと身を滑り込ませて尚、彼女のその瞼は閉じられたままだ。

初めて見る貴色の髪を撫でてみる。まるで絹ボンビエクスのような手触りの髪。その髪を一房取り上げてははらはらと白いシーツの上に落としてみる。

『…………早く目覚めろ、その瞳はどんな色をしている？』

初めて会った人間を、しかもここではない違う世界からやってきた彼女を一目見た時から、愛おしいと感じた。今までの自分ではありえない感情に彼は内心戸惑いつつも、決して不快ではないこの感情を持って余すように彼女を抱きしめ眠りにつくのだった。

### 第三話・目覚めと衝撃

どちらかと言うと寝起きの悪い彼女は、その日も目覚めてからしばらくベットの中でグズグズと起き上がるのを渋っていた。

隣にある暖かな何かにすり寄れば、まるで答えるように抱きしめてくれるそれにさらにすり寄って、存分に微睡の心地よさを堪能してから彼女は気づく。果たして自分のベッドにこんな物はあっただろうか？いや、一人暮らしの部屋に自分以外の誰かがいるはずがない。

恐る恐る掛布の端から視線を上げた彼女の視界に、銀と青が映る。

『おはよう。昨夜はよく眠れたかな？』

「お、おはようござい、ます？」

自分のすぐ隣、自分の腰を抱き寄せたやたら綺麗な顔の人が、やはりやたら綺麗な微笑で自分を見下ろしていた。厚いカーテンの間から零れる光に彩られた銀の髪。微笑に細められた瞳は穏やかな青。恐ろしいまでの美しさを持った男性を、漣は生まれて初めて見た。

なぜ、男性だと分かったか。先ほど自分がすり寄った胸元に自分

と同じふくらみがなかったからだ。冷静なように見えて、内心パニック状態の彼女が再度男性に視線をやると、男性はやはり魅惑的な笑顔を浮かべる。

その笑顔に漣の鼓動が早くなった。

容姿に合う、低く魅惑的な声がそっと囁かれる。何故、自分がこの男性と一緒にいるのかと混乱していると

『空腹になっているだろう？昨夜は夕食も食べずに眠っていたのだから』

そう言われたところで、未だパニックの真ただ中にいる彼女には空腹も感じられない。ようやくと視線を巡らせて、ここが自分の部屋どころか以前ブラウン管に映っていたヴェルサイユ宮殿の一室のような豪華なところだと理解した。

「あの……ここ、どこですか？」

『ここは私の部屋だ』

「あなたの？なんで……」

彼女は益々パニックに陥った。何故見ず知らずの男性の寝室で自

分が眠っているのか？そもそも、昨日はいつたい何時眠りについたのかそれすらも思い出せない。

懸命に昨日の出来事を思い出そうと唸る彼女を、細めた視線でアベルは観察していた。

『……………』

どうやら彼女自身、自分の世界からこちらへ召喚されてきたという事を分かっている様子だ。ならば、わざわざ話す必要もないだろう。それがアベルの答えだった。

『私が仕事を終えて部屋に戻ると、君はもうここに眠っていたんだ。気持ちよさそうだったから起こさずにいたが……………』

「えっと……………それって私があなたのベッド占領しちゃったんですか？」

『まあ、そうとも言えるか？』

その言葉に、彼女は思わずその場に正座し、深々と頭を下げた。

「ベット占領しちゃってすいませんでした」

その姿にアベルは思わず小さな笑みを零す。

『いや、気にしなくていい。見ての通り、大人4人寝てもまだ寝れるベッドだ。君ひとり眠っていてもさして問題ない……ところで、君の名前は？』

「あ、漣です。 冴木漣」

『さえきれん？変わった音の名前だな』

「あ、いえ。 冴木が苗字……家名で、漣が名前です」

『ほお、家名があるのか。なるほど、レンというのか。私はアベル・ナイトレイン。 神聖ナイトレイン王国第13代国王だ』

「しん、せい…ナイトレイン…国王？」

鸚鵡返しに呟いた漣の表情が訝しげな物に変わる。

「あの、ごくおうつって王様って意味ですか？」

『ああ、少なくともここではその意味で使うな』

「……………」

『どづじしたっ？』

出来ることなら否定して欲しかった気持ちを見事に裏切られ、漣はがっくりと肩を落とすものの、アベルはその理由が思い当たらない。

「……………あの、じゃあ私って……………えっと、不敬罪？とかにあたるんですよね？」

『なんだ、そんなことか。案ずるな、レンを不敬罪で投獄しようなどとは露ほども思っていない。それよりも、先に朝食にしよう。今の状況を話さねばな』

「はあ……………」

促されるまま、ベッドの下に足をおろし毛足の長い絨毯の上を歩く。

「（うわぁ、ふかふか。こんな所歩いてもいいのかな？）」

『と、その前に着替えだな。レンはどんな色が好きだ？』

「へ？青と黒……………」

絨毯の感触を楽しんでいる間に、不意にかけられた声に漣は慌てて答える。慌てて我に返って視界に飛び込んできた、しなやかな筋肉に包まれた身体にかぁっと頬が熱くなる。

何せ、出来るだけ視界に入れない様に俯きかげんで話していたのに、慌てた結果、不意にしなやかな筋肉に包まれた胸板をばっちり見てしまったのだ。

放って置けば熱が上がり続けそうな頬を自分の手で包んで、漣は大きく深呼吸をした。

『どうかしたか？』

「あ、いいえっ、なんでもありません」

『そうか。今、朝食の準備と何か着る物を持ってこさせる。いくら王城内が暖かくとも、これから冬の季節ヒエムス。そのままでは風邪をひいてしまう』

言われて初めて、彼女はそういえば幾分ひんやりとしているような外気に、改めて身体を震わせた。何時の間に火が入れられたのだろう？パチパチと爆ぜながら燃える暖炉の前に座って、ようやくホッと息を吐きだす。

「あの、いろいろありがとうございます」  
『何がだ？』

今さらながらとは思ったものの、いきなり見知らぬ場所で目覚め、

見ず知らずの男性の腕に抱かれて眠っていた事実に必要な以上にパニックにならなかったのは、冷静な彼の態度と優しい微笑のおかげだ。

とはいえ、未だここがどこなのか、（少なくとも日本でない事は分かったが）なぜ自分はこのな所にいるのか、どうすれば帰れるのかが分からないのだが。

「えっと、なんかいきなり現れてお世話してもらって」

『気にすることはない』

「で、でもっ、思いつきり不審者ですよ？それに、あなた……陛下下は王様なんだし……」

『私の事はアベルでいい』

「アベル、さん？」

『アベルだ』

「アベル……」

『それでいい。確かに、普段であれば異常だろうな、だが今は神の末娘である女神ユーリアを求める時期だ。異世界からやってきた客人が王のベッドで眠っていても何ら構わないさ』

アベルの言葉に、漣は衝撃を受けることになった。



## 第四話・お誘い

漣がこの世界に現れて2日。臆気ではあるがこの世界の事がなんとなく分かってきた。とは言え、まだ王族の居住区である場所から出たことはないのだが。

まず、この世界には”魔法”というものが存在し、この世界に生きる人々は大なり小なり必ず魔法が使えるという事。世界には5つの大陸があり、これはもともと一つの大陸だったが、遙か昔に起こった大災厄と呼ばれる神々の争いが起こった時、5つに分かれたのだとか。その5つの大陸は、各々違う種族に統治されていて、世界に存在する種族もこの5種である。ちなみに、存在する種族は手先が器用な人族、背中に大きな双翼を持つ有翼人族、野性的な感と素早い動きを誇る獣人族、屈強な身体と深い知性を持った竜人族、存在自体が希少な精霊族だ。そして、この世のすべての理が創生神である主神によって支配されていると信じられている世界なのだ。

まず、何よりも驚いたのが銀髪碧眼の麗人、アベルがこの神聖ナイトレイン王国の若き王である事だ。確かに海外では歳若い国王がいることもあると聞いた事があるが、ただ、若い国王がいたとしても政治的な面ではあまり活躍しているかどうか怪しいところだ。

だが、アベルは国王として最終決定権を持っているし、国に関わる機関を動かすことができると言っていた。重要な地位に立つにはそれなりの実績と才能が必要であるのだが、アベルは王子時代からの実績と神童と呼ばれていた過去から反対する者もすくなかったら

しい。

そんなこの世界の常識が漣にはいまいちピンとこない。まあ、日本とほとんど環境が違うのですぐに納得できるものではないかもしれない。もうひとつ、漣が驚いたのが城の敷地の広さだった。

漣がいるのはアベルの居住区域で、王城の一番奥にある王族の家のようなものらしい。館や塔というよりも、独立した一つの城に近いそこは、王族のためとはいえ、とても広いのだ。そんなにこの国の王族は多いのだろうか？

思わず東京ドーム何個分だろうと考えてしまったのは日本人の性だ。だが、窓の外から眺める限りでも確実に5個以上は入ると思う。建物だけでなく、庭もただっ広いのだ。

神話を信じ、神を信じ、言い伝えを護る。姿も見えない不確かな存在を信じる事が出来る彼らを、漣は素直にすごいと感心した。

彼女自身、神の娘の生まれ変わりと言われたところでとても信じがたい事だったし、今もまだ夢を見ているような気がしてならないから。

「レン様、いかがなさいました？」

「……あ、ううん。なんでもないよ、シンシア」

ふと声をかけられて、漣は慌てて我に返る。どうやら自分でも気づかぬうちに思考の波に囚われていたらしく、ぼんやりしていたようだ。

傍らに立ち、午後のティータイムの給仕を務める侍女の名はシンシアという。柔らかなベージュ色の髪と瞳をした背の高い女性で、先日から漣付きの侍女長となった地属性の持ち主だ。

彼女の他にアリスという名の桜色の髪の火属性の少女と、白藍色の髪のエイミーという名の侍女が漣付きの侍女となった。

「ねえ、シンシア」

「はい、レン様」

「この世界の事を学ぼうと思ったら一般的にはどうするのかしら？」  
「それは、スコラの事でしょうか？」

白磁に青い小花柄のティーカップに新しい紅茶を注ぎながら、シンシアは小首を傾けた。

「スコラ？」

「ええ、商家の子供たちや庶民の子供が基本的な計算や言葉を教わ

ったり、共同生活を学んだりする場なのです」

「へー、学校みたいなものかな？じゃあ、例えば私ぐらいの年齢の人が何かを学ぶにはどうしたらいいのかしら？」

『それならば、家庭教師をつけよう』

「アベルっ！！執務はもういいの？」

不意に部屋の入り口辺りから聞こえてきた声に漣は駆け寄る。

『ああ、少し休憩をとった。それで、レンは何を学びたいのかな？』

漣の手の甲に軽く口づけを落とした後、アベルは漣をソファに促した。

「えっと、この世界の食材の事を知りたいの」  
『食材？』

アベルが首を傾げる。

「うん。この世界って塩や砂糖が極端にすくないでしょ？もしかしたら私の学んだ事が役に立つんじゃないかなって……」

『ほう、レンは学生だったのか』

「うん、フードコーディネーターの資格を取るためにね」

『ふーど、？』

「えっと、新しい料理の開発をしたり、食材から新しい調味料を作ったりとかそういう事をするの」

『料理の開発？レンのいた世界とはまた随分興味深い世界だな……』

「そうかしら？」

『では、誰か食に詳しい者を手配するとしよう。ああ、それから今日は思ったより早く仕事が終わりそうだ、陽のあるうちに庭園に出てみないか？』

「いいんですか？」

『ああ。一度庭に出てみたいと言っていたらどう？奥には温室もある晚餐はそこで済ませてもいいな』

「ありがとうございます、アベル」

広大な庭を散歩してみたいと言った、自分の言葉を覚えていくれた事が嬉しくて、漣は笑みを見せる。それに小さく頷いて答え、アベルは立ち上がった。

『夕暮れから冷え込む、温室の中も気温が下がるはずだ防寒を忘れずにな?』

「はい。アベルもあまり無理はしないで下さい」

『ああ』

立ち上がり、執務に戻ってゆくアベルを見送って漣はホッと息を吐いた。

「よろしゅうございましたね、レン様。ずっと外に出てみたいと仰っていましたもの」

「ええ、陛下は覚えていてくださったみたい」

楽しみだ、と笑みを浮かべる漣を微笑ましげに見つめながら、シンシアは何かを思いついたようにポンと手を打つ。

「アリスとエイミーが戻りましたら早速伝えなくてはなりませんね。アリスがまた張り切りますわよ?」

「でも、ちよつと庭に出るだけよ?」

「あらあら、他の方でしたらともかく陛下とお出になるんですもの……そうと決まったら早速準備を!!!レン様、もう間もなくアリスたちが戻りますので私、少し失礼いたしてもよろしいでしょうか?」

「それは構わないけど……どこへ行くの？」

きょとんとした表情で問いかける漣にシンシアは少し悪戯な表情で唇の前に指を立てた。

「すぐにお分かりになります。レン様はお部屋でお寛ぎになってくださいまし」

そう言って、パタパタと駆けて行くシンシアを少し肩を竦めて見送った漣は、言われた通り部屋に戻ると夕暮れには出かけるだろう庭園に思いを馳せていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8116z/>

---

世界の鎖

2012年1月13日03時47分発行